

# 猪犬と登る猪獾の頂点へ

猪獾の上級編 ②〇 田宮 治

## 勝つて知る猪獾の極致

私は接戦を必ず勝ちに繋げるほんの少しの差を、この一戦でどうしても見せて大切な置き土産にしたい猪止め現場を心ゆくまで調べ上げていた。

「こうなったらもう大丈夫だ」と、すっかり安心してすべてを親方の北嶋氏に任せたこの止め現場でありながら、ほんの少しのところで猪に逃げられてしまった。私はその訳が知りたくて、逃げた猪を追うことは引き続き北嶋氏に任せて、猪止め現場に急行した。

そこは大杉林（樹齢八十〜百年）のなだらかな下草地で、大杉の根元を中心に下草が引き抜かれ黒い土が剥き出しになって、まるで土俵のようである。

「ここでやり合っていたのか」と、マロ号、シロ号、ヨシ号の雄姿を思い浮かべながら、さらに周りの状況を調べると、五、六メートルの大杉の根元にもその下の根元にも激戦を物語る生々しい止め現場の跡が残っていた。まるで今、流り（や）の杉林を囲った猪犬訓練所によく見られる光景である。

猪はどの場所でも一様に大杉で弱点の尻を守って戦い続けており、いずれの場所にあっても、いざという時にはいつでも逃げ出せる態勢である。

つまり、犬たちに止められてはいるものの、咬み止めて振じ伏せられたものではなく、猪側から見れば余裕を持って止まっていたことになるのだ。

この状況で北嶋氏が上から飛び下りて来たので、猪から北嶋氏は丸見えだった。だから、迫り来る

危険から難なく逃走できたのである。犬たちが断然有利になる谷底まで落とされずに、その手前で止まったという事実を含めて、この猪がいかに強く戦い慣れているかを如実に物語っている。私は改めてガリであることを思い知らされた。

「これは大変なことになった。この戦いは簡単ではないぞ……」。北嶋氏にすべてを任せてこの戦いに勝つことで集大成としたいと思っていたが、ガリ相手となると見守っている場合ではない。私は突き付けられた恐ろしいまでの現実の中で、必死で突破口を考えた。

「さて、どうしたものか？」

急ぎGPSで犬たちの状況を確認すると、犬群はまだ元気で向こう側の大山にいて、追い鳴きで攻めまくっている。その大山は大峰

が二分された右の大尾根が続いているもので、この尾根の先には平野氏と坂東氏の二人のタツがいる。当然、まともにはげば猪はこのタツに嵌まるはずだが、このガリではそううまくいくまい。

だからといって、ヨシ号たちだつてこれくらいの相手にむざむざ負けて逃がすわけもない。必ず大尾根のタツの手前でもう一、二度は止め切つて、ガリ相手に真つ向勝負をかけるに違いない。その時こそがこの戦いの勝負どころであり、寄り付きと攻め方はそれぞれ猪止め獾の極致でなければ通用しない。

平野さんにまた、「田宮さんの独壇場だ」と言われそうだが、「ここは一番、俺がやる。北嶋よ、焦るなよ。すぐ行くから頑張つて待っていてくれ！」と、心の中で叫びながら小川を渡り田んぼの畔を突っ走り、北嶋氏の後を追って向かいの大山を必死で登った。

やつとのことで大杉林の中に群生している孟宗竹の大藪にたどり着いた。やつぱり登っている小峰の両側は猪の掘り跡だらけで、大

きな猪の寝跡までそこそこにあるが、大たちは当然そんな跡に関係なくガリを這って、小峰を真つすぐ上に登っている。その後を追って、八合目くらいの高にある立派な猪道に突き当たった。

この猪道は大山を八合目で切り分けるように大杉林の中を奥に向かって続いているが、その猪道には真新しい猪と大たちと、北嶋氏は足跡までもがくつきりと残っていた。注意して猪跡だけを拾ってみると、驚くほど足跡の間隔が広い。全力で疾走したものだ。猪はヨシ号たちとあれほどの激闘をしていながら、何事もなかったかのように小峰の急坂を真上に向かって登り、使い慣れた猪道に乗り、思いどおりに逃がっている。

私は大杉の根元で猪跡を見ながら「何という強さだ。このガリは化け物か」と、苦笑いしながらその場に座り込み小休止をとった。流れ出る汗をタオルで拭いながらボトルの水をガブ飲みして、これから始まる大決戦に備えて銃を念に点検し、気持ちを整えた。

ちょうどその時、ポケットの無

線にヨシ号とシロ号の急を知らせる甲高い猪を攻め立てる鳴き声が入って来た。

取り出した無線機からはマロ号の妻い威嚇の唼り声である。「よしよし、その調子だ。いよいよ止め切るな、これは……」と音量を上げると、マロ号のドスの利いたウーッウー、ワンワンの唼り声と、ヨシ号とシロ号の甲高い連続鳴きが入って来る。

「よし、とめたぞ！」。マロ号たちの鳴きは、めっほう強い大物に對して少し間をとって攻め立てる時のもので、いつもの自慢の吠え込みである。「これは凄いいことになったぞ……」と、改めてGPSで調べた犬群の位置は、この大山が大尾根となり続いている一番奥の小沢の上辺りである。

その小沢は上りながらかなり奥まで続いているが、大たちが猪を止めているその先は両側一帯が真竹の大藪であり、小沢の下には今朝、北嶋氏が挨拶した飼犬が鳴いている農家がある。

真竹の大藪を突き抜けて越えられると、集落である。この真竹の

大藪に逃げ込まれないように、また民家や集落に猪が近づかないように二人のタツが頑張っている。本来なら、こんな見事に張った北嶋氏は親方として立派なものであり、タツの手前で犬群が猪を止めているのだから、ここまでの戦いぶりは大したものである。

このまま追い立てれば必ずタツに嵌まる全く理想的な戦いなのであるが、現実はこちらからの戦いがあるが、現実はこちらの本領が発揮され、

ガリならではの本領が発揮され、恐ろしく危険なのである。まさにここからの戦いに勝ってこそ「勝って知る猪猟の極致」である。私はこんな大一番がやりたくて、大たちを鍛え上げ、単独で腕を研いできたのである。マロ号たちのこの鳴き声は何を意味するのか、心に届かないで何とする。「すぐジシが行くから、それまで頑張っているよ」と、祈る気持ちで猪道に乗り突っ走った。

### 必殺の三発目で決まり

GPSを左手に持ち、犬群の位置を確認しながら大杉林を突き抜

け、一本目の出峰を越えた。急に見晴らしが良くなり、止め現場は三〇〇メートル上である。その途中に小峰が一本下りているが、幸い下草がなく見通しの良い雑木林である。

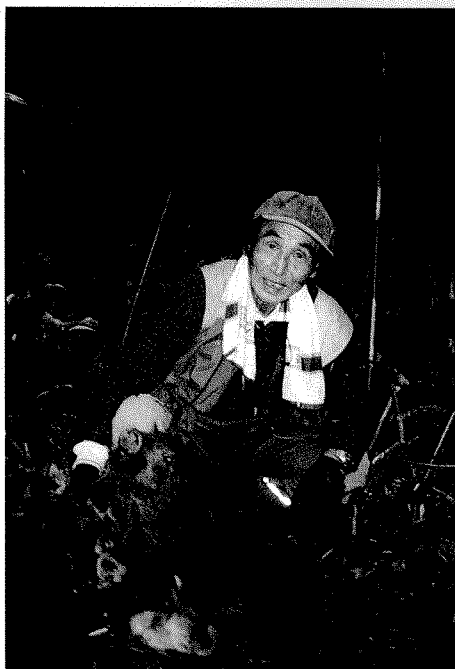
大たちはワンワン、ギャンギャンと相変わらず元気があがるが、落ち着いた間のある鳴き声なので、多分これは大木の根元が大岩を挟んでの攻防らしい。

こうなったら、マロ号たちはガリであろうと絶対に逃がしはしない。恐らくいつものように、時間をかけて慎重に攻め込むはずだから慌てることはない。必ずチャンスを見て落として来るに違いない。私は見通しの良い小峰から山容を綿密に検証し、猪が逃げ落ちて来るとしたら松の木辺りと見当をつけた。そして、小沢の下にある民家から飼犬の鳴き声が聞こえる小峰を、松の木を目指して登り始める。

必死で小峰を登っていると、何となく前に新人の坂東氏がタツで頑張っているではないか。坂東氏は嬉しそうに話しかけてきた



シロ号、ヨシ号、マロ号は追い咬み自在の一流芸だ。どんな大猪でも決して逃しはしない。必ず谷底に追い落とし止め切る。文句なしの愛犬たちだ



パイ号が捕まえた仔猪。もったいない、あと1年もすれば立派になったものを……。ごめんよ、チビ

が、それを打ち消すように一方的に「ここで動かず静かに待つように」と告げる。

そして、「猪は左横の上のほうから来ると思うので注意してください。犬たちは今、左上八合目辺りで止めているので、左下には絶対に動かないように」と言い残し、ちようど左横に見えるようになった松の木を目掛けて走り続けた。

「もう少しだ。あと少しの間、犬たちが勝負に出ないよう……」と念じながら、ようやく一本目の小峰に立つ松の木の手前五〇メートルの山平に立った。「よし、ここがいい。もうしめたもの。犬たちが追い落とすとすればこの凹地のほかにない」。

私は見通しの良い山平の中で、猪が落ちて来る少し窪んでいる真ん中を避け、一〇メートルの小峰寄りの所に足場を固めて銃を握りしめた。「さあ、来い」と上方を睨んだ。とっくに北嶋氏や平野氏が寄り付いているはずだが、銃声もしないので、動きがさっぱり分からない。止め切って三十分にもなるといのに、犬たちまでもな

なか勝負に出ない。

左斜め上六〇メートルが止め現場だ。マロ号たちのことだから、怒鳴らなくても私が来たことは既に感づいているはずである。

私は独断でグループ猟のど真ん中に飛び込み、無断で単独猟をやっているようなものだ。しかも、厳しく言い続けてきた止め現場の常識である上からの攻めではなく、真下に立っているのである。

ここは急斜面で所々に立ち木や小藪があつて、決して撃ちやすい場所ではないが、猪は必ずここに来ると決め込み、飛び下りて来る猪を想定して銃の肩付けをして思い切り送り込み、二発撃ち込む感じを確かめている。その時だ。

犬たちの凄鳴き声が一際高く山々に響き渡った。「よし、来るぞ！」と気合を入れて身構えた。その瞬間、バリバリッと小峰の枯れ枝をへし折り、突然現れた猪がまるで黒い大きな石でも落ちるように、犬たちの鳴き声に押し捲られ、真上からころげ落ちて来た。予想どおり落ち葉を蹴散らし土を跳ね上げ、ドッドドットと凄



ゲン号とサクラ号の止め猪。ライフルで一撃

想い出の大猪（メス）。ゲン号とともに山梨での単独猟。腸抜きで一三七<sup>キ</sup>は、メス猪であつたので、今までの最大である

い勢いで一気に近づいて来た。私は咄嗟に犬たちと猪を見計らつて、猪の鼻先から地面に突き刺す感覚で一発を撃ち込んだ。猪はそのままの勢いで私に向かって来た。このままでは危険なのでいつも使う大声を張り上げ、「この！」と怒鳴りながら、すかさず二弾目を送り込んだ。

かけ、左に大きく旋回して坂東氏のタツに向かつて全力疾走である。「これは一大事だ。そこに行かせてなるものか」と、よく狙つて必殺の三発目を撃ち込んだ。「よし決まり」である。ガリはガグツと転けて腕きながら下にすり落ちてゐる。犬たちはもの凄い狂騒で、ここぞとばかりに飛びかかり咬みまくつて大混戦になつた。千葉ではライフルが禁止なので

撃ち込んだのはスラッグであるが、一〇倍くらいからなのでその効き目は確かなはずである。それなのに凄く強さで首を振つて応戦している。「これはヤバイ！」と、そう思つて素早く一発だけ弾を込めて、犬たちを交わして一ぱくくらいから猪の背口に止めの一発を撃ち込んだ。当然これで完勝となつたのであるが、こんなガリとの戦いでは最後まで気が抜けないのである。一発で倒れたと思つた

半矢の猪が狂つたように暴れ、犬たちがケガをするのは、こんな状態の戦いの時が多い。

私はここで初めてホツとして全員に猪を撃ち獲つたことを報告した。そして犬たちには「よしよし、よくやった。マロ、ヨシ、シロ」と、名前を呼び続けて褒めまくつた。「よしよし、そら咬めよ」と、肉などどうなつてもいいと思ひ、存分に咬ませてやった。

大たちは嬉しさを爆発させているが、こんな決戦で勝つ喜びを重ねることで一流犬に登り詰めるのである。私は写真を撮り、状況を確かめながら頭合を見て、「ありがとう。もういいよ」と、一頭ごとに言葉をかけて近くの立ち木に繋ぎ、いつものようにジャム入りのコッペパンを半分ずつ与えた。今日ほどの子も興奮していて少しだけしか食はず、私に喜々として身を寄せて来る。「よしよし、よくやった。いらかつたなあ（大変だつたなあ）」と、全身を撫で回しながらケガを確認するが、こんな激戦にもかかわらず、かすり傷一つなかつた。（つづく）